

ロブサン・ダンジンの叛亂と清朝

——叛亂の經過を中心として——

加 藤 直 人

一

雍正元（一七二三）年、青海ホシュート Qoşuyud の盟長ロブサン・ダンジン Lobjang danjin < Blo bzang bstan 'dzin は、チベットの支配權、族内の混亂に對する清朝側の約束不履行・不當介入を不服として叛亂を起した。この叛亂は、これ以降の青海及びカム Khams を含むチベットに對する清朝の影響力をきわめて強くしたことなど、多くの意味でこの地方の歴史の大きな轉換點となつた事件であつた。

ロブサン・ダンジンの叛亂に最初に注目したのは、ペテック Luciano Petech 氏であり、氏は一八世紀のチベット・中國・モンゴルをめぐる國際關係の中でこの叛亂を論じられた。⁽¹⁾ また、佐藤長氏はこのペテック氏の研究をふまえ、多くの清朝側史料と地圖を驅使してこの叛亂を詳密に考察され、⁽²⁾ 最近では中國の馬大正、馬汝珩の兩氏が、主として佐藤氏の研究に依據して叛亂の經過をまとめられている。⁽³⁾

筆者は、ペテック、佐藤氏の精緻な研究に大きく據りながらも、兩氏がほとんど参照されなかつた第一級史料である『年羹堯奏摺』（ロブサン・ダンジンの叛亂を鎮壓した清朝側の最高指揮官、年羹堯の滿漢文奏摺等を收める）、⁽⁴⁾ 『宮中檔雍正朝奏摺』（當時の清朝側官人の滿漢文奏摺等を收める）⁽⁵⁾ 等を利用してこの叛亂の再検討を行なっている。そして、叛亂の原因、勃發

にいたる経緯についてはすでにこれを公にした。⁽⁶⁾ 小稿は、これら新史料を利用した再検討をとおして、前稿で觸れえなかったロブサン・ダンジンの叛亂の経過とそれに對する清朝の對應について論じようとするものである。ただ、紙幅の關係で、ロブサン・ダンジンとジュンガル Jügün-γar との關係、および、清朝の青海やチベットに對する善後策については別稿に譲ることにする。

二

まず、前稿においてあきらかにした、ロブサン・ダンジンが叛亂を起こすにいたった経緯は、要約すると次のようであった。

康熙帝が崩じ、雍正帝が即位すると、青海、チベット方面では政治的な大きな變化が生じてきた。まず、これらの地方の軍務を統轄していた貝子胤禩 Yün-i (康熙帝の第一四皇子) が北京に召喚され、チベットに駐留していた清朝軍が、チャムド Chab mdo に暫時一部の兵は残すものの、ほぼ全面的に撤退することになった。この清朝軍は、康熙五十六(一七二七)年、ジュンガルの長ツェワン・ラプタン Cevang arabian The dbang rab brtan に遣わされたツェリン・ドンブ Cering dondub Tshe ring don grub がチベットに侵入して、チベットの事實上の王であったホシュートのラサン・ハーン Lhajang qayan を殺害し、當地を混亂に陥し入れたため、その祖グシ・ハーン Gusi qayan 以來チベットを支配してきたホシュートが要請して出兵したもので、一七二〇年にジュンガルを潰走させたのちもその地に駐留していたものである。そして、その出兵の際に康熙帝は、青海ホシュートに對して、そのチベットにおける支配權の所有を認め、チベット回復のあかつきには、青海ホシュートの中からハーンを立てるよう旨を降していたが、この時點にいたってもそれは認められなかった。青海内部では、この不満から清朝と離反しジュンガルと結ぼうというような會盟がたびたび開かれ、そこには親清朝派と親ジュンガル派の深刻な對立がみられた。青海の盟長ロブサン・ダンジンはこの

ような情況の中で族内の統一を目指し、ジュンガルに使者を送る一方、エルデニ・エルケ・トクトネー Erdeni erke toytónai < Er te ni er khe thog tho nas > 親清朝派を一掃する行動にでた。清朝側、とくに雍正帝はロブサンのこれらの行爲に對し、表面上は和解させるよう命じたが、一面では青海の内部問題に深く介入していった。

一方、チャガン・ダンジン *Čayan danjin* は、雍正帝の即位後に行なわれたツェリン・ドンドブ征討に関する恩賞で、青海でロブサン・ダンジンにならぶ「親王」に封ぜられ、實力的にもロブサンに比肩すると清朝側に認められていた人物であった。ロブサンが青海統一の行動に出る以前、このチャガンは、その甥にあたり、先に死亡していた貝子ダンジュン *Danjung* < *Bstan bstrung* の遺した領域を不法に占據した。ダンジュンは青海の中でも有数の勢力を有した王であり、このチャガンの行爲は青海の内部においてきわめて大きな問題となった。年羹堯をはじめとして青海に關係する清朝の官人も、これはチャガンの「專擅」な振る舞いであると上奏しているが、雍正帝は終始チャガンを支持し、ついには旨をもつてそのダンジュンの遺領の相續を認めた。青海内部の問題をこのように清皇帝が介入處理することは、盟長ロブサンを無視したかたちとなり、その反發は必至であつたが、雍正帝はそれを賭しても、當時すでに青海統一の行動にでていたロブサンを牽制する方向にでたのである。その背景には、先にも述べたように、チャガンの實力が清朝側に過大に評價されていた事實があつた。しかし、ロブサンは青海の諸王タイジをバル・トロガイ *Bar toloyai* の地に集め、盟長としてチャガンに對し、ロブサン自身の言葉をかりれば「こと〔の白黒〕をはつきりと」させる行動にでた。それに際し、ロブサンは自らをダライ・ホンタイジ *Dalai gong tayji* と呼ばせ、諸王タイジには清朝から與えられた封號を稱するのを禁じ、以前の名號を稱させて清朝に對する不滿をあきらかに示したのである。

雍正元年八月一七日、ロブサン・ダンジンは黃河を渡り、チャガン・ダンジンを襲つた。そして清朝側の豫想を裏切り、チャガンはまったく敵するところなく河州へと敗走した。⁽⁷⁾

三

青海の實務にあたつていた侍郎常壽 Caragoo から、チャガン・ダンジンが攻撃されたという第一報⁽⁸⁾をうけて、雍正帝は、ロブサン・ダンジンの今回の行動は反逆行爲であり、ツェワン・ラブタンと結んでチベットを占據しようとすることはあきらかで、慎重に検討して即時鎮壓せよ、と年羹堯に旨を降した。⁽⁹⁾「即時」というのは、現在ロブサンの軍が五月のエルデニ・エルケ・トクトネーの襲撃以來動きずめで疲弊しているはずで、今こそ大軍をもってロブサンを攻撃するのに絶好の機會であるという考えからであつた。年羹堯はロブサン征討のため、各關係箇所⁽¹⁰⁾に連絡を行ない、準備をすすめる一方、指揮系統の圓滑化を圖るため、自ら西寧に赴くことにした。そして、その直後、九月一日に再び雍正帝からの上旨⁽¹¹⁾がもたらされた。それは、常壽から、チャガンがロブサンの攻撃を防ぐことができず、河州（甘肅省臨夏縣）の境口に保護を求めてきている、という報告が届いたのをうけて、チャガン保護のため太僕寺少卿花善 Hwa-shan を遣す一方で年羹堯には自ら西寧に赴いてロブサン對策を講じよという内容のものであつた。この中において、雍正帝は先の「即刻鎮壓」という考えから少し變化し、攻撃は指示したものの、ロブサンを従わせて北京に連れてくることもまたよいとしている。また、敗走したチャガンの勢力をまとめて、ロブサン征討に利用すべきかどうかは年羹堯の判斷に委ねた。ここに年羹堯は輕裝のまま同月二〇日に西安から西寧に向つて出發し、同時にロブサン對策の基本方針として、四川提督岳鍾琪、西寧總兵官黃喜林を中心としてこの任務に當らせる、チャムド駐在の總兵官周瑛にチベット方面の警戒にあたらせる、先の上旨で送られてきた戸部の二〇萬兩銀をつかい、西寧に糧秣の備えをするほか、軍費として使用する、もし足りなければ西安布政使（胡期恆）の庫の銀を適宜流用する、等々官兵に必要な費用にいたるまで細かく九件の計畫を上奏した。⁽¹²⁾

⁽¹³⁾これより先に年羹堯は、ロブサン・ダンジンならびに青海の一二名の王^{オイグ}らのもとに通事を遣し、宣布書を傳達していた。⁽¹³⁾これには次のようであつた。

……汝ら青海にすむ大小のものは、皆グシ・ハーンの子孫であり別のものはいない。元來、皆代々聖主の御教化に従い、各々重く厚い御恩を受けた。汝ら兄弟のなかで互いに仲違いして掠し殲滅したまま現在に至っている。我れら大中國からは、事件毎に出兵させてその罪を問わなかった。常に汝らを和解させて事をおさめたことは、皆聖主の好生にして衆生を養育する至仁のみ心である。もし、汝らのことが出てきたとき、ただちに兵を送って罪を問ひに行かせたならば、數年のうちに汝らグシ・ハーンの子孫らを皆殺し盡すことになろう。今ロブサン・ダンジンに法に従わず、汝らの兄弟を掠し殺し恣に行動し、反逆の心がはつきりとでてきた。汝らが「ロブサン」威におそれ迎合したことは、大變な罪となった。我れ、いま兵を集めて皇帝陛下に奏聞して、大軍を率いて「汝らの」罪を問ひに行く。汝らのうち、聖主の恩を思つて反逆に従わなかったものどもは皆散つて各々もとの處を見守つて、沈靜化したときにみだりに動くな。我れは罪のあるものを討ち滅ぼすのであり、汝らをすこしも犯すことはない。もしそれでも反逆を行なうものどもに出逢つたときは、我が兵が是非を分かつたず皆殺しにして、その子、奴僕を「我が兵の」功あつたものに賞賜する。どうしてもその罪は赦さない。我れ自ら四川にいたとき、兵事を掌り、チベットを取つたことは汝ら青海のものどもの普く知れること。汝ら王・宰桑タイシジャヤンらのうち、我れのもとに來たものも多く、我れの言葉に二言のないことは皆知っている。汝らの兵はどうやつてもツェワン・ラブタンには及ばない。我れは生命を慈み、多くのものを殺すことは好まぬので、とくに悟らせるため傳え宣布した。⁽¹⁴⁾

一〇月二日、年羹堯は先の常壽をロブサン・ダンジンのもとに事情聴取のために遣した。⁽¹⁵⁾そしてその日、彼は撫遠大將軍に任じられ、⁽¹⁶⁾ロブサン征討の責任を委ねられて、同月六日に西寧に到着した。⁽¹⁷⁾年羹堯はそこで前掲の宣布書に對するロブサンの返書と、ボンチュク・ワンジャル Pungchur wangjal、⁽¹⁸⁾ダシ・ドンドブ Dashi dondub、エルデニ・ボショクトウ Erdeni bošyru らが常壽に宛てた蒙文書簡を受けとつた。⁽¹⁸⁾ロブサンの書簡には、この宣布書の内容すなわち「皇帝に叛いた」ということを言葉強く否定し、エルデニ・エルケ・トクトネーやチャガン・ダンジンらを襲つたのも、彼らがロブ

サンを讒言したためであるという辯明が記され、冬には雍正帝に拜謁して報告する、と結んでいる。一方、ポンチュク・ワンジャルの書簡には次のようにあった。

……皇帝陛下の御命令で、ダンジン王を上にしたせて、王の言葉にしたがって行動せよ、とおっしゃるので、我れらは王の言葉にしたがい行動している。いままで、先の皇帝陛下（康熙帝）の御世よりこのかた、すべての大事小事に皇帝陛下の旨を降されている。青海の事務を掌った汝（常壽）らのような大臣らが「その旨を」告げ、我れらもそのとおりにしたがって行動する。いまこのような大事に、皇帝陛下の旨がない。總督がかよう「宣布書で」述べても、皇帝陛下の旨を俟たないで、どのように總督に返事をしたらよいか判らない。このことを、我が青海の事務を掌った大臣である汝（常壽）らが、はっきりとする書簡を送っていただけないか。

ダシ・ドンドブ、エルデニ・ボシヨクトウ兩名の書簡もこのポンチュク・ワンジャルのものと略同するものであったようであるが、これら青海の王らは、この年羹堯の突然の宣布書に當惑し、その眞意を常壽からききだそうとしたわけである。年羹堯は、これらロブサン・ダンジンらの返書に對して、素直に恐れるような様子はあつたが、厄魯特らの性質はづるがしこく信頼できない、今はこのようにいっても後日心變わりするか豫期できない、などと雍正帝に感想を送った。しかし常壽をロブサンのもとに遣したいま、彼の歸るのを待ち、ロブサンの様子をみて對應しようというのがその基本的な考え方であつた。⁽¹⁹⁾

そして、年羹堯はロブサン・ダンジンらが行動を起こした際の對應策として次のような調兵を行なつた。

まず、チベットから引き揚げてきたチャハル Cagar のツェワン・ノルブ Cewang norbu、ホシエートのアボー Abuun の兵のうち、比較的狀態のよかつたツェワン・ノルブの兵四百を留め、都統吳格 Uge に委ねて管理させ、ツェワンとアボーはそれぞれの原住の地に歸した。また西寧境外四〇里の地にあるトンコル寺 Stong 'khor dgon pa で情報を収集していた都統西倫圖 Sirentu 配下の北京の兵一三八名は一〇月一日に歸京させたが、西倫圖及び四名の章京は指揮系統の

擴充のため西寧に残した。一方、署理西安將軍普照 Pujoo に連絡を取って、副都統伊里布 Ilibu に西安の滿洲兵五百を帶領させて西寧に調し、ロブサン對策立案のブレーションとしては、前鋒統領蘇丹 Sudan、岳鍾琪、常壽、頭等侍衛達爾丹⁽²⁰⁾の四人を選んだ。

そのほかに、撤兵の終わったチベットに青海の兵が入るのを防ぐために、チャムドに駐させた松潘總兵官周瑛にその地の防備を固めさせる一方、ムルウス Murui usu (ツァイダム方面) からの侵入を防ぐため、トゥルファーン Turfan 駐在の副將軍阿喇納 Arana とその配下の兵のうちの二千をガス Gas の地に向かわせた。後者は阿喇納自身の奏請により、年羹堯が施した措置で、バルクル Barkul には靖逆將軍富寧安 Funingga を、トゥルファーンは都統穆森 Musen にそれぞれ委ねた。さらに、バルクルの綠營兵二千を調し、ブルンギル Bulungir (肅州からハミへ通ずる大道上にあり、ここから青海方面、瓜州、敦煌方面への道が分かれる交通の要地) に送らせ、參將孫繼宗に領させてその地に駐留させた。これは、この地方では、ロブサン・ダンジンの行動にならって、掠奪事件などが頻發し緊迫した状態であつたからでもあつた。⁽²¹⁾

ここで興味深いのは、對ジューンガル防衛の最前線から四千名もの將兵をこの青海警備のために調したことである。この背景には、別稿にて觸れるように、ジューンガル側、清朝側雙方ともがこの時期關係改善に力を注いでいたということもあるが、これが年羹堯の命令ではなく、阿喇納自身の要請であつたことを考えると、トゥルファーン側の事情も考慮する必要がある。トゥルファーンでは、すでに佐口透氏があきらかにされたとおり、駐留する清朝軍が糧秣を自給することができず(ある程度耕作は行なっていた)、現地の住民から收穫物を借りて兵に給しており、これは住民たちにとって大きな負擔であつたのである。⁽²²⁾

四

ロブサン・ダンジンのもとに遣された常壽は、雍正元年一〇月九日にロブサンの牧地バヤン・ブラク Bayan bulay に

いたった。常壽はそこでロブサンに今回の行動を質す皇帝の旨を告げ、その理由を問うた。ロブサンの答えは次のようであった。

我れは、我れらの者バルジュール・アラブタン (Baljur arabtan)、チュイラク・ノムチ (Čuyirak nomči) らを遣して、主(雍正帝)に「今回の行動の」理由をだし、上奏するために送ろうと言っていた。「ところが」今、總督(年羹堯)が兵を率いて、我れらを討ちにくるというので、これら「の者」はことごとく恐れ、あえて「内地に」入ろうとしなかった。我れらの配下のものどもは、兵を連れて入ろうと言う。我れらは、今「から」チャガン・トロガイ (Čayan tolojai) の地に會盟する。汝(常壽)も我れと一緒にに行け。その地であらためて決めよう。

すなわち、使者を送る時に年羹堯が動いたので、使者が恐れて内地に入らず、今回の行動の説明ができなかったというのである。そして、常壽はロブサン・ダンジンとともに會盟の地チャガン・トロガイへと向った。ところが、一〇月七日、ホル Hol という地にいたった時、彼は突然拘束され、ハンボ gambu mkan po の廟に幽閉される結果となった。ロブサンは常壽に向って、

このことは我れのあずかり知らぬところである。部下が勝手に行なったことで、汝を殺す氣はない。

と述べたが、このうち常壽は二ヶ月以上にわたって幽閉されつづけることになる。⁽²³⁾この常壽幽閉の理由は明白ではないが、一つの青海の内部情報では、のちに常壽をジュンガルに連れて行き、自分たちが本當に清朝に對して叛いた、という證しにするつもりだったともいう。⁽²⁴⁾

このチャガン・トロガイの會盟でどのようなことが具體的に議されたのかは不明であるが、のちの情況から判断すると、清朝に近い者を一掃したロブサン派親ジュンガル派がその會盟を支配したのは想像に難くなく、穩健派、中立派また會盟に出席しなかったものには強い壓力が加えられ、⁽²⁵⁾「一日を期し」た清朝守備隊に對する攻撃が決定されたのである。⁽²⁶⁾

常壽が捕えられた二日後の一〇月一日、青海の軍は西寧の南川の境口をやぶり、申中堡を圍んだ。⁽²⁷⁾申中堡は、西寧と塔爾寺(クンブム Sku-thum 寺)を結ぶ大道上にあり、西寧の南の要害である。戰鬪は三日に及び、二一日には申中のナソ(Man so ラマ寺の管事人)⁽²⁸⁾が青海側と内應して、申中堡の牆壁に穴を穿ち、青海軍を導こうとしたが果せず、援軍を得た清朝軍にすべて撃退された。清朝側の報告によれば、青海軍の戦死者は一四〇餘名、清朝軍は七名であり、申中のナソはのちに處斷された。また、その南川の申中堡攻撃と時を同じくして、青海の軍は西寧・西川の鎮海堡を襲った。⁽²⁹⁾當地はチベット、ツアイダム等に通ずる大道沿いの地にあり、そこには七百名の清朝軍が駐留していたが、この襲撃の報告を受けた年羹堯はただちにチベットから引き揚げてきたばかりのチャハル兵四百、西安の滿洲兵一百を援軍として送った。一九日に境内に侵入した青海軍は、二〇日には鎮海堡を圍み、三日にわたって晝夜の別なく攻撃を行なったが決せず、他地域からも兵を移し、この鎮海堡攻略に兵力を集中した。年羹堯はこの事態に、二五日夜半、あらたに動員したばかりの西安の綠營兵一千五百名を鎮海堡に急行させ、ようやく青海軍を撃退した。清朝側の報告では、青海軍の死者は六百餘名、清朝軍は西安の八旗滿洲驍騎校サンゲ Sangge 以下六名であり、清朝側の誇張を差し引いても、この戦いは青海軍の大敗であった。この鎮海堡の戦鬪にも先の申中堡と同じように、ラマ寺管事人^ナが青海側に通じ、援助を行なっていた。その多巴^ダの地のナソ、アワン・ダンジン Awang danjin Ngag dbang bstan 'dzin は、青海側に糧秣等の供給を行なったとして清朝に捕えられ、次のように供述した。

ロブサン・ダンジンは「一〇月」二一日に到着してここに五日聞いた。兵の「總」數ははっきりわからない。大體でみれば五・六千である。兵「の中」に貝勒^{バイレ}ボンチュク・ワンジャル、ゲレク・ジノン(Geleg jinung)、ダシ・アルブタン(Dasi arbian)、台吉^{タイジ}・エルデニ(Erdeni)、チャガン・ダンジンの女婿アラブタン(Arabtan)「等」が皆來ている。ロブサン・ダンジン自身は、綿甲に古い黄色の狐皮のかぶりものを着け、鳥鎧を一梃擔いでいる。彼の「本來着けるべき」服やかぶりものは從者に着けさせて、行「軍」するとき、その者を中央に置いて、彼自身はその傍を行く。

今回はロブサン〔自身〕の大きな蒙古包を持って來ず、帳房ヤンのみもって來て、毎日兵營として張った帳房の中にやすむ。⁽³⁰⁾

時間的なことから考えて、ロブサン・ダンジンらは、チャガン・トロガイの會盟ののち、そのままこの鎮海堡に直行したのであらう。そこでロブサンが影武者をたてているところは興味深い。またロブサンは第七世ダライ・ラフ Dalai bla-ma ケルサン・ギャムツォ Skal bzang rgya mtso の兄チンノー Phrin las を同行していた。⁽³¹⁾ この同行の意義についてはすでに別稿で論じたが、この點だけからみても青海がこの鎮海堡攻撃に相當な力を注いでいたことが理解できる。

西寧南川の申中堡、西川の鎮海堡の攻撃に失敗したのち、青海軍は北川の新城を圍んだ。⁽³²⁾ 新城は西寧より北、約九〇里の地にあり、游擊馬成輔以下八百名の清朝軍が駐留していた。青海軍（清朝側の記録では二千餘）は新城の背後の山上より銃撃を加えた。年羹堯は、この軍が南川、西川の敗殘兵を吸収して強大となるのを恐れ、急ぎ一〇月二八日、西安、固原、西寧の綠營兵三千を救援に送り、子母砲の威力などで鳥鎗しか持たぬ青海軍を壓倒した。そして、この戦鬪で得た捕虜から清朝側は次のような情報を得た。

ロブサン・ダンジンとは、以前彼らの青海の一切の輩にあまねく傳えて、一齊に一日を期して全力で反亂を起こそうと言ひ、ロブサン・チャガン Lobjang 'cayan、ジグジヤブ Jirjib、アラブタン、バルジュル・アラブタンを源州、⁽³⁴⁾ 甘州等の地方の境口を擾亂させに送っているといふ……。

この情報のとおり、涼州、甘州等の地方では緊迫した情況が生じていた。永昌副將劉紹宗の報告によれば、一〇月二五日に平羌口で三人のホシュートを捕えたが、これらの者も先の情報と同じく青海の一齊蜂起を供述し、また三〇日に捕えたホシュートらは、新城、高古城、また永昌から二〇里の地に青海の軍が集結し、機を伺っていることをあきらかにした。そして、新城堡が青海軍によって圍まれたのは、その三〇日の巳刻（午前一〇時頃）であつた。同日申刻（午後四時頃）には火が放たれ、城内の守備李國強以下多數の死傷者を出した。清朝側の報告によれば、この燒死者だけで二・三〇名に

のぼった。青海軍は同時に、甘州所屬の大馬營附近、涼州所屬の高古城、水磨關、蔡旗堡、北古城、水泉驛、南把截、西把截、莊浪所屬の鎮羌驛等いわゆる「河西回廊」に位置する諸地方を襲った。その他、涼州所屬の張義堡等の地では、近隣のラマたちに率いられた一團により攻撃を受けている。

この事態に、年羹堯はこれら甘州、涼州等の地に軍を進めている青海のロブサン・チャガン、アラブタン、バルジュル・アラブタン、ジグジジャブの牧地を攻撃することにした。⁽³⁵⁾これらの牧地は、西寧の北約三百里、大通河近くに廣がっており、この本據地を攻めることによって、年羹堯はロブサン・チャガンらの行動を牽制しようとしたのである。しかし、この作戰のためには、西寧とこれらの牧地の間にあるムスリムたちを従わせる必要があった。⁽³⁶⁾これら、上北塔、下北塔に住むモンゴル人のムスリムたちは、清朝側の情報によれば、六・七〇村に分れて暮しており、穀物等のみのりも豊かで、兩地方で三千餘騎の兵を出すことが可能であった。これらのムスリムは、ここ一年清朝に非協力的で、下北塔に住む者は先のロブサン・チャガンらに所屬しており、上北塔に住む者は、ロブサン派の中心人物、アラブタン・オンボ Arabian Onbu とスルザ Surja (ラサン・ハーンの次子で、ジュンガルのチベット侵攻の際捕われてイリに送られていた) の支配を受けていた。スルザの屬地は、その後、妻チャンマル Chingmar が管理していたが、この當時チャンマルはアラブタン・オンボの攻撃を受けて彼の下に行き⁽³⁷⁾、實質的に上北塔の地方はすべてアラブタン・オンボによって掌握されていた。そして、この上北塔のムスリムは、アラブタン・オンボが清朝守備隊を襲撃した際(どの作戰に彼が参加したかあきらかではないが、地域的にみれば西寧・北川の新城堡包圍等であろうか)、その戦鬭の主力であった。年羹堯は、西寧の彼の屬下の營の千總馬忠孝をこの上・下北塔に對策のために遣した。馬忠孝は西寧の出身で、この地域の事情にあかるく、まず下北塔を戦鬭もなく従わせ、次の上北塔の一部を従わせた。⁽³⁸⁾ただ、アラブタン・オンボとつながりの強い上北塔の三村だけは最後まで抵抗したので、上・下北塔で歸順したムスリムを用いてこれを滅した。じつは、これら歸順したムスリムたちは、のちの青海軍掃討に清朝側に大きな力となるのである。そして、これらの攻撃ののち、雍正元年十一月八日、年羹堯は先のロブサン・チ

ヤガンら青海の諸王^{タイイ}の牧地に向かつて、西寧總兵官黃喜林らを遣した。⁽³⁹⁾

黃喜林らは一月九日に西寧・北川の境口を出て、奇嘉寺、⁽⁴⁰⁾グヤン Sgo mang 寺を攻撃した。これらの寺はいずれもアラブタン・オンボに與し、清朝に敵對する動きがあったとして攻撃されたもので、ゴマン寺はこの時焼かれている。詳細は別稿にて論じたとおりであるが、この戰鬪にシラ・メルゲン⁽⁴¹⁾ Sira mergen 率いる下北塔のムスリム四百名が参加していたのは興味深い。黃喜林らは一日に大通河を渡り、諸王^{タイイ}の牧地にいたった。甘州、涼州、莊浪方面に展開していたロブサン・チャガンらは、清朝軍が自らの牧地に迫るのを聞き兵を引いて歸ったが、清朝軍の前に戰鬪もなく逃竄した。⁽⁴²⁾ 雍正元年一〇月一九日に西寧・南川の境口を破り、申中堡を攻撃してからわずか一月足らずで、じつはロブサン・ダンジンの叛亂は實質上終わつた。あとは、清朝側の追及であつた。ただ時節的にも寒冷であるので、本格的な反撃は、春を待つことになつた。⁽⁴³⁾

五

ロブサン・ダンジンは、鎮海堡攻撃ののち、體制を立て直そうともせず逃亡した。⁽⁴⁴⁾そして、青海の諸王^{タイイ}の中からはやくも清朝側に降る者が出てきた。

ボロ・チュンケク河 Boro Cüنگkeg rhol 流域（西寧の西北方、アラブタン・オンボの牧地の近くで、スルザの牧地もここにあつた）に住むセブテンジャル Yečen beile Sebtanjäl tshe brtan rgyal 等、一〇月六日に年羹堯が西寧に到着したのを聞いて、使者メンドゥ⁽⁴⁵⁾ Mendü を遣した。年羹堯はセブテンジャル自ら西寧に來るよう命じ、彼はそれに従つて、西寧近郊の戰鬪がひととおりおさまつた一月一五日に到着した。年羹堯はセブテンジャルに、他の青海の王ら^{タイイ}に彼と同じように清朝に歸順するよう勸告させることにした。年羹堯は基本的に今回の叛亂は、ロブサン・ダンジンとアラブタン・オンボ、エルデニ・タイジ、バルジュル・アラブタン、チュイラク・ノムチが心を一にして起こしたもので、それ以外のもの

は彼らに強要されて参加したものであると考えていた。それ故、ロブサンらが逃亡した今、多數の來歸者があると豫想し、來歸者の叛亂への係わり具合を判断する必要を感じていた。⁽⁴⁶⁾ 雍正帝もこの年羹堯の措置に同調したが、全ての事に強い態度で接するよう指示したあと、

青海の全てが永遠に平和となるのは、この度の汝の處理にかかっている。第一に黃教は甚だ重要であり、蒙古人大衆の心に係わりあっている。決して輕んずることはできない。このことを常に氣にかけよ。⁽⁴⁷⁾

と注意を與えた。

年羹堯の豫想どおりセブテンジャルは、一二月に入ると近鄰に住む青海左翼の公ツェリン Cering とその弟の台吉バルジェル Baljur、そして公ノルブ・ポンチュク Norbu püngchü とその弟の台吉ナムガン Nanyang 及び所屬の二千餘を連れて西寧に到着した。彼らの言によれば、アラブタン・オンボが會盟に行った隙をみて、家畜や武器を皆放棄して來歸したとし、年羹堯はすべてを赦し、食料、茶葉等を與え、西川口外のセブテンジャルの牧地に皆住わせることにした。⁽⁴⁸⁾ このためかこのあと次第に清朝側への投降が増えていった。

アラブタン・オンボが行った會盟は、一二月九日、ロブサン・ダンジン⁽⁴⁹⁾の出席のもとチャイジ Çayji (青海〈湖〉の西南、チャイジ川の附近であらう)の地で開催された。この會盟にはロブサンに連れられて侍郎常壽も同席しており、その他の参加者は、アラブタン・オンボ、ザンバジャブ Jangbajab、チュイラク・ノムチ、バルジュール・アラブタン、ロブサン・シハワン Lobjang cevang、ダシ・ドンドブ、ボンチュク・ワンジャル、ジグジジャブ、ツェリン・ドンドブ Cering dondub であった。一二月三日、ロブサン・ダンジンは、その雍正帝宛の手紙一通、およびアラブタン・オンボとハンボの年羹堯宛の手紙各一通を常壽に託し、彼を解放した。常壽は一二月一九日に西寧に到着し、今までの経緯を報告したが、この常壽がもたらしたロブサンらの書簡は残念ながら今までのところ発見しておらず、その内容ははっきりとしない。しかし、その翌年二月五日にいたって、ロブサンを除くこれらの王のほとんどが連名で年羹堯のもとに歸順を求めて

使者を遣している點からみて、この會盟は叛亂の失敗により危うくなった自らの保身と今後の清朝との對應を商議したに相違ない。また、會盟の背景には、ロブサンらが青海の王らに約束していたジュンガルの援軍が、まったくの偽りであると判明したこともあった。ロブサンとジュンガルとの關係については別稿を用意しているのでそれに譲るが、ツェワン・ラブタンの使者モンケ Mongke は十一月一六日にツァイダムに入り、青海の諸王に對して、ジュンガルが青海を援助する意志がないことを告げたのである。⁽⁵¹⁾

清朝側は、しかしながら、來歸者に決して寛大な措置ばかりとっていたわけではない。叛亂の原因をつくった一人、ラジャブ menggen daying Lajab の子二人は、二月三日、四川提督岳鍾琪の軍に投降し、彼らはロブサンに協力しなかったのがこれが認められた。⁽⁵²⁾ このことを聞いて、クンブ寺のラマ、ハンボ・ノムン・ハーン Qambu nomun qayan Mkhan po no mon han (Mkhan po a chi thu no mon han blo zang don grub) は、岳鍾琪のもとに降したが、このハンボ・ノムン・ハーンは、ロブサンの叛亂に大きく關與する人物であった。年羹堯は、ただちに法で正して、ラマたちに對する見せしめとしたい。

と、このハンボ・ノムン・ハーンを處斷した。そして、清朝は、西寧周邊で叛亂に關與した、またそれを援助した者の責任追究をはじめるのである。

六

まず清朝軍の攻撃を受けたのは、碾伯所（西寧の東、現在の樂都）の東南、巴暖（西寧の東南）の西に住むジャシ・ドンドブ Jasi dondub 所屬の者たちであった。⁽⁵⁴⁾ これらは、ロブサン・ダンジン（僅か五名）の叛亂に援助（僅か五名）し、のちに清朝側千總以下一九名が彼らに殺害されたという理由で攻撃されたのである。鎮海堡等の戦鬭が終了したのち、十一月二日に、年羹堯は黃喜林を遣してこの一帯の村の掃討を行なった。二日から二六日にいたる五日間に、黃喜林自身の報告による

と、殺した賊はあわせて六百餘名、一五〇以上の村を焼き、焼死する者、負傷者はきわめて多くにのぼった。これらは、叛亂参加の責任追究というより、千總が殺されたことに對するあきらかな清朝側の報復であつた。

一方、雍正元年一月二八日、四川提督岳鍾琪は四川・松潘から青海の歸(貴)德堡に到着した。⁽⁵⁵⁾ 歸德堡は西寧の南、黄河沿いの要衝であり、その近郊の上寺東策布、下寺東策布の兩地方のチベット人たちは、エルデニ・ボシヨクトウの所屬で、ロブサンに援助を行なつていたといひ、歸德堡を掠そうと計畫していたという。岳鍾琪は部下が一時彼らに捕えられたのを口實に、一二月八日、上寺東策布を襲ひ三百餘戸を完全に掃討した。また、下寺東策布のラマ、チエチエン・ナンソ *Ce'en nangsu* はその所屬の七百を連れて投降したが、一部地域で清朝に叛いた者もあり、即刻處斷された。

岳鍾琪は、一二月一五日に歸德堡を出發し、西寧に向つたが、途上、郭密 *Gomi* のチベット人を掃討することになつた。西寧の南川口から約二百里にある郭密の住民は九部に分かれていたが、以前、胤禩がチベット征討に赴く時、その馬を奪つたり、ロブサン・ダンジン⁽⁵⁶⁾の叛亂が起つてからは、西寧と歸德堡を結ぶ大道に面することから、その大道を遮斷したり、往來する公文書を奪うなど清朝に敵對する行爲がみられた。この郭密九部のうち、三部ははやく清朝側に降つたが、残りの六部は清朝に従わず、そのうちのある者は岳鍾琪を迎えに來た西寧の副將宋可進の部隊を襲ひ、その兵のうち三名を殺害するなどの行動をとつたので、同月一八日當地に到着した岳鍾琪はこれらを一掃する作戰に出た。岳鍾琪は土司の兵をうまく用いて山中の敵を破り、とくにそのうちの一部は住民のすべてを殺害した。この掃討も、清朝の報復的色彩の濃い行動であつた。そして、この作戰の終了後、岳鍾琪は一二月二六日に西寧に到着した。⁽⁵⁶⁾

年があけると、莊浪のアガン・ナンソ *Ayang nangsu* に對する攻撃が行なわれた。⁽⁵⁷⁾ アガン・ナンソは、先の叛亂で涼州、永昌等の地が攻撃された際、ロブサン・ダンジンに情報流したというのが攻撃の理由であつた。雍正二年一月一日、涼莊道の蔣洞は固原の兵及び民兵に命じてこのアガン・ナンソの部を襲わせた。この攻撃はほとんど抵抗も受けずに行なわれたが、その所屬の六九名が殺害され、婦女子や家畜は兵に與えられた。アガン・ナンソ自身も翌日捕えられ、訊

問の結果、ロブサンとの密通を自供し、即刻處刑された。アガン・ナンソの自宅からは、ロブサンからの書簡が発見されたというが、彼とロブサンがどのような関係であったのか、詳細な點は不明である。

このアガン・ナンソの掃討と時を同じくして、岳鍾琪は青海の大寺ゴンルン寺 (Dgon lung byams pa gling) に向っていた。この清朝軍のゴンルン寺攻撃については別稿にて詳しく論じたのでくり返さないが、この作戦には、八、七二〇名もの清朝軍を動員し、清朝側の數字で六千名ものラマ、番子を殺害して寺を焼いたのである。

年羹堯によれば、ゴンルン寺のラマたちが一月一日を期して清朝軍に對して攻撃を開始すると周圍に傳えていたので、その力が集結した時に集中攻撃を加えたといふことであるが、ロブサン・ダンジンらが敗走して青海の諸王が歸順しようとははじめている時期に、何故このような行動にでたのであろうか。清朝側の史料で判斷する限り、ラマ側も相當な準備を行なっており、清朝もこの寺がロブサンの父で、やはり青海の中心人物であったダシ・バートル Dashi bayatur の遺體が安置されているなど、ロブサンと係わりの深い寺として常に注意を拂っていた。⁽⁶⁰⁾ とくに座主のダクマ・フトクト Dayma gutuqtu (福田洋一、石濱裕美子氏が整理された『ゴンルン寺目錄 *Bshad sgrub bstan pai 'byung gnas chos sde chen po Dgon lung byams pa gling gi 'dkar chag*』所載の座主の系譜からみると、⁽⁶¹⁾ 當寺第二六代座主ガーワン・テンジン・チンレー Ngag dbang bstan 'din 'phrin las、通稱テン・チュブチン 'Dan na grub chen であらう) は、年羹堯によって、讀經のためと稱して騙されて西寧に連れて行かれ、そのままその地に幽閉されていた。ダクマ・フトクトは年羹堯自らが西寧に呼んだのであるから、これは年羹堯が西寧に到着した雍正元年一〇月六日以降のことではなければならない。このダクマ・フトクトは、何度も寺に歸る意志を示したようであるが、ゴンルン寺を牽制するために、いわば人質として、年羹堯はそれを赦さなかった。このこともこの時期にラマが行動を起こした理由の一つとして挙げられるかもしれない。ちなみに、ダクマ・フトクトはこの事件の直後處刑された。⁽⁶²⁾

これ以降、二月に古浪、鎮羌營、岔口堡等の莊浪より甘州に至る大道沿いで、石門寺等の者が掠奪事件その他を引き起

(63) こしてゐる（ロブサン・ダンジンの叛亂との關係は不明）以外、本格的に清朝に敵對するような行動はみられなくなったのである。

七

青海内部では、これらの情況の中で清朝への歸順の主張が高まってきた。そして、一月一二日にウラーン・ホシヨ Ulayan qošu（青海の北岸、ツェリン・ドンドブの牧地附近）の地で、青海有力九王タインの會盟がもたれた。⁽⁶⁴⁾ その會議の様子は、まず、ツェリン・ドンドブとロブサン・チャガンの二人が、「去年の行動は、ロブサン・ダンジンとアラブタン・オンボが率先して行なつたにすぎない。……我れらが行って、大將軍に事情を出し告げよう」と主張した。ロブサン派のチュイラク・ノムチ、バルジュル・アラブタンはこれを拒みえなかったが、「チャガン・トロガイに會盟して様子をみてまた相談したい」という考えを述べた。

ここにポンチュク・ワンジャルは弟イエシエイ・ドルジャブ Yesai doljab とともに清朝に投降する意志を固め、その使者は二月二日に西寧に到着した。その使者がもたらした書簡には次のようにあった。

我れの父〔エルケ・バルジュル Eke baijur……グシ・ハーンの第六子ダライ・バートル・ドルジ Dalai bayatur dorji の孫で、青海の中心的存在であつた〕が王であるときに、〔同じく〕王であつたダシ・バートルと争ひあつたので、〔父が〕死んだあとは、孤兒〔の〕我れらを苦しめて、我れらの隸民、奴僕を掠し奪つた。のちに主（康熙帝）は慈しんで官人を派して〔その奪ひ取られた奴僕らの〕大半を我れらに取り戻してくれ、また官人を派して我れらが牧地を常に保護させるために見張らせてくれた。今年行なつた罪といふものは、ロブサン・ダンジンの世代が高く上に立つので、我れらは策なく従ひ行つた。今主（雍正帝）を思い〔清朝側〕の方に移ろうといへば、周圍に人がいるので全く策がない。……

これは當然歸順を求める書簡であるから、すべてが眞實であるかどうかは不明だが、ポンチュク・ワンジャルの父がロ

ブサン・ダンジンの父ダシ・バートルと争った結果、ポンチュクやその弟が苦勞し、清朝の援助によってようやく存続していたという記述はおもしろい。たしかに、ポンチュクの曾祖父ダライ・バートルは、第五世ダライ・ラマからダライ・ホンタイジ *Dalai qong tayiji* なる稱號を與えられており、⁽⁶⁵⁾ 青海の中心的存在であつたのに比して、曾孫のポンチュクの時代にはその勢力はみるべきものがなかつたのである。

三日後の二月五日、今度は貝勒ロブサン・チャガン、貝子ジグジジャブ、台吉ゴンボ・セブテン *Gimbu sehen*、ナガン・イェシエイ *Nagan yesai* らが西寧に來歸してきた。⁽⁶⁶⁾ 彼らの言葉によれば、ロブサン・チャガン、ジグジジャブそしてツェリン・ドンドブの三名はアラブタン・オンボを捕えて年羹堯のもとに降るつもりであつたが、事前に發覺して、ツェリン・ドンドブがチュイラク・ノムチに襲われ、このたびの歸順となつたのである。

このような、ポンチュク・ワンジャル兄弟、ロブサン・チャガン、ジグジジャブの歸順は、年羹堯にとってロブサン・ダンジンらを征討する「天の與えた絶好の機會」⁽⁶⁷⁾ であり、もしロブサン・ダンジンらが清朝に歸順しようとする者の馬や駱駝を手に入れて遠くに逃竄してしまえば、事件の終結に時間がかかるとし、二月八日、岳鍾琪、總兵官吳正安 *Ujengga*、⁽⁶⁸⁾ 黃喜林、侍衛達爾、副將王嵩、宋可進、紀成斌等に兵六千名を率いさせ、二つの道から、西寧を出發させた。年羹堯は、軍馬の状態や氣候等の問題で、豫定ではもう少しのちに出兵する豫定であつたが、この「絶好の機會」⁽⁶⁹⁾ をうまく利用することにしたのである。そして、雍正帝もこの作戰に大きな理解を示した。

一方、青海の諸王は、先の會盟ののち使者を年羹堯のもとに遣した。これらの使者が西寧に到着したのはロブサン・チャガンが來歸したのと同じ二月五日であり、これは、岳鍾琪以下六千名の清朝軍が青海征討に向かう三日前のことであつた。⁽⁷⁰⁾ 彼らの年羹堯に對する書簡には概ね次のようであつた。

撫遠大將軍、太保、公御自身に貝勒アラブタン・オンボ、チュイラク・ノムチ、バルジュール・ラブタン^ラ等が書を呈す。上大主（康熙帝）の御世に、ダシ・バートル親王が長となつて、グシ・ハーンの子孫である我らはすべて黃教を

うけてよりこのかた安逸に暮していた。今でも今上陛下がまた倍舊の恩を及ぼし、我れらを慈むので、我れらは皇帝陛下のほか他に思いを寄せるところはない。今ロブサン・ダンジン⁽⁷¹⁾は年若く、汝らの委ねた言葉が厳しいので、我れらはロブサン・ダンジンに従い事にかかわったのである。「また」上大主(康熙帝)が封じたラマ、チョイブサン⁽⁷²⁾ Cuyibiang⁽⁷³⁾ Chos bzang ノムン・ハーン(ゴマン寺の座主で、黃喜林により殺さる)を「清朝側が」滅したのを思うと、我れら自身、内地に「歸順し」入りたいという氣持があつても「やはり」我れらは畏懼する。汝「年羹堯」自ら境外に出(ることができ)なければ、汝自身と同等な大臣らを出して、チャガン・トロガイ等の地に會盟して、我れらの全ての「罪」の有無を分別するならば、我れらは王ロブサン・ダンジン⁽⁷⁴⁾を連れて行かせ、彼の「罪の」有無をあきらかにしようとなを遣そう。汝らが「もし」ゆるし會盟して、先の上大主(康熙帝)のように慈んでいただければ、各々原牧の地に行つて安逸に暮すであろう。「もし」そうでなければ、我れらは散り散りに行く。「このようなことになれば」汝らの名も汚れるぞ。このようにできるか、と誠の意を表わし書を呈した。會盟を議すなら、「その」期日をあきらかにし、安撫することを鑑みていただけるか……。

すなわち、この書簡は、先の會盟におけるチュイラク・ノムチとバルジュール・アラブタンの意見が色濃く反映されている。先述のとおり、この使者が到着したときにはすでに清朝側は青海内部の不調和を認識しており、掃討を決定していたので、この青海側の要求はまったく無視され、かわつて、ロブサン派のアラブタン・オンボ、チュイラク・ノムチの使者に對して厳しい訊問が加えられた。⁽⁷²⁾ 彼らは前掲の書簡のとおり、

大將軍「年羹堯」がもし「罪」を赦して會盟するような様子ならば、會盟を行なつて各々「自らの」牧地にいたい……

という王らの言葉を傳えたが、チュイラク・ノムチの使者宰桑ヒヤ・ドンドブは次のようなことも語つた。

去年、ロブサン・ダンジン、アラブタン・オンボ、我れの主チュイラク・ノムチ、青海の諸王⁽⁷⁵⁾は、ジューンガルに「我れらは内地に離反し叛く。我れらに兵を援助せよ」と使者を遣はしていた。ツェワン・ラブタンの返使が到着する前に

ロブサン・ダンジンらはそのまま叛いた。(我れらが)内地の大兵に破られて敗走したのちに、ツェワン・ラプタンの返使ムンケという者が到着して告げることには「我れらの王(ツェワン・ラプタン)の言葉は次のようである。『汝らは内地の大ハン(清皇帝)の恩を受けて久しい。汝らの住んでいる處は内地から近いのに汝らの内部は仲が良くない。叛亂を起こせば汝らにとって何が良いのか。我れの住んでいる處ははなはだ遠い。援兵を送ることはできない。汝らがもし良ければ、我れらはお互いに人を遣して使者を往來させ、よろしく暮すことが良いぞ』」と(ムンケが)告げるので、我れの主チュイラク・ノムチ、アラプタン・オンボ、チン・ホンタイジ Qing gong tayji 全九名の王らは、それでおそれて歸順しようと大將軍に求め使者を遣したわけである。……

ツェワン・ラプタンとロブサン・ダンジンとの關係については別稿にて詳しく論ずる豫定であるが、この時期ツェワンは清朝との關係を保ちながら、カザーフ、キルギズ方面へとその勢力を展開しており、(73)その上、ツェワンは、先に青海が清朝より援軍を得てチベットのジューンガル軍を討つたことに對する大きな恨みを、この時にいたってもなお抱いていた。(74)このような情況の中で、青海がジューンガルの援軍を受けることはほとんど不可能であった。

八

二月八日に西寧を出發した岳鍾琪は、一日に青海の東岸附近に位置するバル・チロー Bars çilayru に到着した。(75)その地で得た情報によれば、バルジュル・アラプタンは、バル・チローの近くウラーン・ベルケ Ulyan berke にいるということであった。岳鍾琪は、その夜、ただちに兵を三道に分け追撃させたが、バルジュル・アラプタンはツェリン・ドンドブから清朝軍の動きを知らされ、一緒にいたアラプタン・オンボとともに逃亡した。岳鍾琪は吳正安に兵一千五百を委ねて北から、黃喜林、宋可進に兵一千五百を委ねて中央から、岳鍾琪自らと達爾は兵一千五百を率いて南からこれらを追撃し、王嵩、紀成斌には各兵五百を委ねて山を搜索させた。殘餘の兵は糧秣の管理をさせることにした。岳鍾琪の軍は夜を

徹してアラブタン・オンボらを追ひ、イエケ・ハイルギ Yeke qayirgi (青海の東北岸に流入するイエケ・ハイルギ川の流域であらう) に到った。アラブタン・オンボは清朝軍が迫ったのを聞き、ハイルギ Qayirgi 山の中へと逃れたが捕えられた。一方、黃喜林は三〇里追撃してバルジュル・アラブタンとその叔父イエケ・ラブタン Yeke rabtan を捕えた。岳鍾琪は、この三人を連れて再び他の王^{タイ}たちの追撃をつづける一方、アラブタン・オンボとともにいたチャンマルを一千の兵を残して監視させた。

そして、岳鍾琪はシルガ・ローサ (青海の西北岸に流入するブハ河の支流、シルガ河 Sir'a yool、ローサ河 Larusa yool の流域) ……チュイラク・ノムチの原牧の地) に二月一四日に到着し、そこで馬忠孝の報告に接した。⁽⁷⁷⁾ それによれば、チュイラク・ノムチは天城チャガン・ハダ *Çayan qada* にいるというので、すぐに兵を派して一五日未明にはその地に到った。チュイラク・ノムチはこの動きを察知して逃亡し、その配下のドゥラル・タイジ Dural tayji とダシ・ドンドブの母は、先に清朝側に歸順したポンチュク・ワンジャルにより捕えられた。ドゥラル・タイジの供述によると、チュイラク・ノムチはその戸口を連れてガス方面へ向う道を逃げたということであり、岳鍾琪はポンチュク・ワンジャルをその追撃に送った。ただ、岳鍾琪は「蒙古人の性質はもとより信頼できない」⁽⁷⁸⁾ と守備劉廷彦等二百の清朝軍をそれに同行させた。

一方、情報によれば、ロブサン・ダンジン⁽⁷⁹⁾ は原住の地にいるというので、岳鍾琪はロブサン攻撃に急行した。一八日、ロブサンの宰桑から得た情報によれば、ロブサンは台吉ザンバジャブと共にエムネブルンギル *Emün-e bulungir* (佐藤氏によれば、エレス・ノール *Ellesi naur* に流入するブルンギル河である)⁽⁸⁰⁾ にいたとのことで、一九日の晩にはその地に到着した。⁽⁸¹⁾ そこで、達翰、黃喜林、王嵩、宋可進に兵一千を率いさせて北道より先まわりしてツァイダムにいたらせ、ガスに逃亡する道を阻がせ、岳鍾琪自身は南道よりロブサンを追撃した。そして、ツァイダムに向う途上で、ロブサンの母アルタイ・ハトゥン *Altai qatun*、妹の夫ゲレク・ジノン *Gelek jünung*、ツァンバギヤ *Cangbagiyai* を捕えた。そのうち二二日にツァイダムにいたり、台吉ザンバジャブを捕えたが、ロブサンはツァイダムから西北の山中に入り逃亡した。⁽⁸²⁾ これよ

り先にチュイラク・ノムチを追ったボンチュク・ワンジャルは一九日の晝、ウラーン・ベク Ulaian bek (位置不明) にいたり、チュイラク・ノムチとダシ・ドンドブを捕えており、ここに、ロブサンを除いて、ロブサンに與した王らはすべて捕えられたのである。⁽⁸³⁾

ロブサン・ダンジン⁽⁸⁴⁾は、ソロム Solun⁽⁸⁵⁾より、ケリヤ(タクラマカン砂漠に面した地)にいたり、砂漠を越えてジュンガルのツェワン・ラブタンのもとに逃れた。

九

ロブサン・ダンジンの叛亂は、青海の諸王^{ヌイ}およびそれに所屬するチベット人、ムスリムによって展開され、その中には多くのラマも含まれていた。そして、叛亂はかなり周到に準備され、⁽⁸⁶⁾また實行された。しかし、その叛亂は清朝軍に敵するところなく、一ヶ月足らずですべて撃退され、青海内部の不調和もあって、わずか四ヶ月餘のうちに鎮壓されてしまった。

先にも述べたように、族内および周辺の者に對するロブサン・ダンジンの叛亂準備は周到であつた。しかし期待したジュンガルは青海を援助することなど考えていなかった。また、年羹堯の事前の調兵が功を奏して西寧附近は守備が固く、内應があつても陥落させることもできなかった。この叛亂の失敗はすべてロブサン・ダンジンの當時の政治情勢に對する認識の甘さに起因している。そして、清朝軍はこの叛亂鎮壓を機に、青海にニル・ジャサク制を導入し、直接的支配をおしすすめていくことになる。

註

- (1) (a) Petech, L.; Notes on Tibetan History of the 18th Century, *Young Pao*, Vol. LII, Livr. 4—5, Leiden, 1966, pp. 261—292.
 (b) Petech, L.; *China and Tibet in the Early XVIIIth*

Century. (Monographies du T'oung Pao, Vol. 1) 2nd. and Revised ed. Leiden, 1972. pp. 95—8.

- (2) 佐藤長「ロフザン・ダンジン」の反亂について」『史林』第五卷第六號（一九七二・一一）及び『中世チベット史研究』（京都・同朋舎、一九八六・三）所收。

- (3) 馬汝珩、馬大正「論羅卜藏丹津叛亂與清政府善後措施」『新疆大學學報』一九八〇年第三期（及び『中國蒙古史學會論文選集』一九八〇年度）所收。

- (4) 拙稿「臺北・國立故宮博物院編『年羹堯奏摺』」『東洋學報』第六〇編第三・四號、參照。なお、佐藤氏はこの史料の漢文檔案は利用されている。

- (5) 神田信夫（『東洋學報』第六〇編第一・二號）、佐伯富（『東洋史研究』第三七卷第三號）兩氏の書評を參照。

- (6) 拙稿「一七三三年ロフザン・ダンジンの反亂——その反亂前夜を中心として——」『內陸アジア・西アジアの社會と文化』（東京・山川出版社、一九八三・六）所收。

- (7) 註(6)論文參照。

- (8) 常壽、雍正元年八月二七日付滿文奏摺（臺北・國立故宮博物院編『宮中檔雍正朝奏摺』第二八輯、六一四～二八頁所收）。

- (9) 無年月（『大清世宗敬天昌運建中表正文武英明寬仁信毅大孝至誠愍皇帝實錄』へ以下『世宗實錄』と略稱する）によれば、雍正元年九月己丑（一一日）「卷一一」である。滿文上諭（臺北・國立故宮博物院編『年羹堯奏摺』へ臺北、一九七一～中卷、七八五～七頁所收）。

- (10) 年羹堯、雍正元年九月一八日付滿文奏摺（『年羹堯奏摺』上卷、一〇五～一八頁所收）。

- (11) 無年月滿文上諭（『年羹堯奏摺』中卷、七八七～八頁所收）。

- (12) 註(10)參照。

- (13) 年羹堯、雍正元年一〇月二〇日付滿文奏摺（『年羹堯奏摺』上卷、一二五～九頁所收）。また、年羹堯は、ロフザン・ダンジン個人にはまた今回の行動を糾弾する書簡も送っている（年羹堯、雍正元年九月一日付ロフザン・ダンジン宛滿文書簡（同書中卷、七三三～八頁所收））。この書簡については、註(6)拙稿、三三八～九頁參照。

- (14) 年羹堯、雍正元年九月一一日書、二二日公布（註(13)奏摺參照）滿文宣布書（『年羹堯奏摺』中卷、八〇四～六頁所收）。

- (15) 年羹堯、雍正元年一〇月七日付滿文奏摺（『年羹堯奏摺』上卷、一二三～四頁所收）。

- (16) 『世宗實錄』卷二二、雍正元年一〇月戊申。ちなみに、年羹堯がこの辭令を西寧で受けたのは、同年十一月二七日であった（年羹堯、雍正元年一二月二八日付滿文奏摺（『年羹堯奏摺』上卷、二二六～七頁所收））。

- (17) 年羹堯、雍正元年一〇月七日付滿文奏摺（『年羹堯奏摺』上卷、一二二頁所收）および同九月一八日付滿文奏摺（上卷、二四頁所收）、同一〇月三日付滿文奏摺（上卷、二四～五頁所收）。

- (18) 註(13)參照。

- (19) 註(13)參照。

- (20) 年羹堯、雍正元年一〇月一六日付滿文奏摺（『年羹堯奏摺』

上巻、一三二～七頁所収。

- (21) 年羹堯、雍正元年一〇月二〇日付滿文奏摺(『年羹堯奏摺』上巻、一四一～五頁所収)。

- (22) 佐口透「清朝支配下のトルファン」、『東洋學報』第六〇巻第三・四號、四～五頁。

- (23) この常壽とロブサン・ダンジンとのやりとりは、年羹堯、雍正元年二月二日付滿文奏摺(『年羹堯奏摺』上巻、二七四～七頁所収)を参照。なおこの幽閉事件については、同、雍正元年一月七日付滿文奏摺(同書上巻、一七二～五頁所収)を参照。雍正帝はこの一件が清朝の面目を潰したとして、嚴罰に處すよう年羹堯に命令し(無年月へおそらく雍正二年一月上旬に下された)滿文上諭(『年羹堯奏摺』中巻、七九六～七頁所収)、年羹堯は、常壽の家産を沒收の上、死罪に處すことに決定し、身柄を西安へ送った(年羹堯、雍正二年二月三日付滿文奏摺(同書上巻、三三九～四二頁所収)を参照)。

- (24) 年羹堯、無年月(おそらく雍正元年一月中旬に出された)滿文奏摺(『年羹堯奏摺』中巻、六六四～八頁所収)。

- (25) たとえば、「中立派」であったセブテンジャルの年羹堯に對する報告(年羹堯、雍正元年二月二八日付滿文奏摺(『年羹堯奏摺』上巻、二三二～六頁所収)を参照。

- (26) 年羹堯、雍正元年一月一七日付滿文奏摺(『年羹堯奏摺』上巻、二〇六～一六頁所収)。

- (27) 青海軍の申中堡攻撃については、年羹堯、雍正元年一〇月二二日付滿文奏摺(『年羹堯奏摺』上巻、一四六～九頁所

収)を参照。

- (28) 佐藤氏註(2)論文一二頁。

- (29) 鎮海堡攻撃については、年羹堯、雍正元年一〇月二七日付滿文奏摺(『年羹堯奏摺』上巻、一四九～一五七頁所収)および、同無年月(前掲の滿文奏摺とほぼ同じ頃に出された)漢文奏摺(同書上巻、五九頁所収)。

- (30) 註(29)滿文奏摺。

- (31) 年羹堯、雍正三年三月三日付滿文奏摺(『年羹堯奏摺』中巻、六三五～四一頁所収)。

- (32) 拙稿「一七二三～四年、青海におけるラマの活動」、『武蔵野女子大學紀要』第一九號、二九頁。

- (33) 年羹堯、雍正元年一月一日付滿文奏摺(『年羹堯奏摺』上巻一六五～九頁所収)。なおこの南川、西川、北川の戦鬪については、年羹堯、無年月(前掲滿文奏摺とほぼ同時期に出された)漢文奏摺(同書上巻、四九～五〇頁所収)を併せて参照。

- (34) 註(26)参照。以下の新城堡、甘州、涼州、莊浪等の地への攻撃も本奏摺による。

- (35) 註(26)参照。

- (36) 清朝の上北塔、下北塔攻撃については、年羹堯、雍正元年一月一日付滿文奏摺(『年羹堯奏摺』上巻、一七八～八四頁所収)。

- (37) 年羹堯、無年月(おそらく雍正元年六月中に出された)漢文奏摺(『年羹堯奏摺』上巻、三五頁所収)。

- (38) この功績により馬忠孝は遊撃に陞任した(年羹堯、雍正元

年二月七日付滿文奏摺〈『年羹堯奏摺』上卷、二四〇～一頁所收〉。

(39) 註(26)参照。

(40) 奇嘉寺、ゴマン寺およびロブサン・チャガンらの牧地に對する攻撃については註(26)参照。

(41) 註(32)拙稿参照。

(42) 先にロブサン・ダンジンに攻撃された清朝に保護されたエルデニ・エルケ・トクトネー所屬のチェチュン・オンボ Cecen ombu の報告によると、アラブタン・オンボを含めて、ロブサン・チャガンらは、チュイラク・ノムチの牧地のあるブハ河 Buga rodi (青海の西北に注いでいる河) 流域へと向ったという(年羹堯、無年月へおそらく雍正元年二月上旬に出された)滿文奏摺〈『年羹堯奏摺』上卷、七〇二～五頁所收〉。

(43) 年羹堯、雍正元年十一月四日付滿文奏摺(『年羹堯奏摺』上卷、一八九～二〇二頁所收)。

(44) ロブサン・ダンジンは、まず青海(湖)の南西にあるダブスン・ノール Dabusun nayur にいたり、のちにはオラン・ムフル Olan muqur (ツァイダムの東、二百里足らずの地)へ移った(年羹堯、雍正二年一月八日付滿文奏摺〈『年羹堯奏摺』上卷、三〇〇～三頁所收〉、同、無年月へおそらく雍正元年一月中旬に出された)漢文奏摺〈同書上卷、四三～四頁所收〉。

(45) 年羹堯、雍正元年十一月二八日付滿文奏摺(『年羹堯奏摺』上卷、二三二～六頁所收)。

(46) 註(45)参照。

(47) 註(45)奏摺に記された滿文硃批。

(48) 年羹堯、雍正元年二月八日付滿文奏摺(『年羹堯奏摺』上卷、二四一～六頁所收)。

(49) 註(23)、雍正元年二月二日付奏摺参照。以下はこれによる。

(50) 年羹堯、無年月(おそらく雍正二年二月上旬に出された)滿文奏摺(『年羹堯奏摺』中卷、六七三～六頁所收)。

(51) 註(50)参照。

(52) 年羹堯、雍正元年二月一日付滿文奏摺(『年羹堯奏摺』上卷、二五三～七頁所收)。

(53) ハンボ・ノモン・ハーンは、ロサン・ツエチム・ギヤムツ * User dog blo bzang tshul khyims rgya mtsho の『マインブム寺目錄 Chos sde chen postu 'bum byams pa gling gi.....dkar chag』(青海人民出版社、一九八二・二)によれば、彼は、クンブム寺第二〇代の座主で、康熙五七(一七一八)年にその位に即している(五九～六二頁)。このハンボ・ノモン・ハーンの行動については、註(32)拙稿、二四～五頁参照。

(54) 年羹堯、雍正元年二月二八日付滿文奏摺(『年羹堯奏摺』上卷、二七九～八六頁所收)。以下はこれによる。

(55) 年羹堯、雍正元年二月二八日付滿文奏摺(『年羹堯奏摺』上卷、二八七～九一頁所收)、および『岳襄勤公行略』(『清史資料』へ中國社會科學院歷史研究所清史研究室編・中華書局)第四輯へ一九八三・四)所收)一七五頁。以下はこれに

よる。

(56) 註(55)参照。

(57) 年羹堯、雍正二年一月九日付滿文奏摺(『年羹堯奏摺』上巻、三二五～二〇頁所収)。ちなみに、この作戰の成功で、蔣河は按察使に陞任している(同、雍正二年二月一二日付滿文奏摺(同書上巻、三六八～九頁所収))。

(58) 註(32)拙稿、二六～七頁参照。

(59) 年羹堯、雍正二年一月九日付滿文奏摺(『年羹堯奏摺』上巻、三二〇～三二頁所収)。

(60) 註(59)参照。

(61) 福田洋一、石濱裕美子『西藏佛教宗義研究(第四卷)——トツカン『一切宗義』モンゴルの章——』(東洋文庫、一九八六・三)一四頁参照。

(62) ダクマ・フトクトについては、註(59)参照。

(63) 年羹堯、雍正二年二月三日付滿文奏摺(『年羹堯奏摺』上巻、三八二～九頁所収)。

(64) 年羹堯、雍正二年二月八日付滿文奏摺(『年羹堯奏摺』上巻、三七七～六七頁所収)。以下はこれによる。

(65) Petech, (a), p. 267.

(66) 註(64)参照。

(67) 註(64)奏摺、三六四頁参照。

(68) 註(64)参照。岳鍾琪は全綠營を指揮するために「將軍」としてこの作戰に従事することになったが、急なことで中央より「將軍」の印、纛等の物が届いていなかった。そのため、彼は年羹堯の「撫遠大將軍」の印や纛、それに年羹堯に下賜

された腰刀まで借りて出發したのである(年羹堯、雍正二年二月八日付滿文奏摺(『年羹堯奏摺』上巻、三五一～三頁所収))。この「將軍」すなわち「奮威將軍」の印が西寧に届いたのは、同年二月三〇日のことであった。(同、雍正二年三月一日付滿文奏摺(同書中巻、四〇三～四頁所収))。

(69) 註(64)奏摺に記された滿文硃批。

(70) 年羹堯、雍正二年二月八日付滿文奏摺(『年羹堯奏摺』上巻、三四八～五一頁所収)。以下はこれによる。

(71) 年羹堯、無年月(おそらく雍正元年一月中旬に出された)漢文奏摺(『年羹堯奏摺』上巻、五八～九頁所収)。

(72) 註(50)参照。以下はこれによる。

(73) 佐口透『ロシアとアジア草原』(東京・吉川弘文館、一九六六・四)一二二～二頁参照。

(74) ツェワン・ラプタンがチャガン・ダンジンの使者バヤルトウ・ホシュエーチに語った言葉(年羹堯、雍正二年一月二五日付滿文奏摺(『年羹堯奏摺』上巻、三三四～八頁所収))。

(75) 年羹堯、雍正二年二月四日付滿文奏摺(『年羹堯奏摺』上巻、三七五～八〇頁所収)。以下はこれによる。

(76) 佐藤氏註(2)論文、一九頁註③参照。

(77) 年羹堯、雍正二年二月三日付滿文奏摺(『年羹堯奏摺』上巻、三八九～九四頁所収)。以下はこれによる。

(78) 註(77)奏摺、三九三頁。

(79) ロプサン・ダンジンの原牧地は、バヤン・ブラクである(註(23)、雍正元年一月七日付奏摺)。この地は、青海(湖)の南、黄河との間に位置している。乾隆の『内府輿圖』では、

「巴彥布拉克」とのみあり、その記載の上に天幕が一つ描かれているだけである。ただ、このときロブサンがここにいたかは不明で、先に述べたように、オラン・ムフルにいた可能性も大きい。

(80) 佐藤氏註(2)論文、一九頁註⑥参照。

(81) 年羹堯、雍正二年三月一日付滿文奏摺(『年羹堯奏摺』中卷、四〇六～二頁所收)。以下はこれによる。

(82) 年羹堯、雍正二年三月八日付滿文奏摺(『年羹堯奏摺』中卷、四一九～三二頁所收)。

(83) 註(81)参照。

(84) 註(81)参照。

(85) 年羹堯、雍正二年六月二日付滿文奏摺(『年羹堯奏摺』

中卷、五七四～七頁所收)。

(86) 先に觸れた莊浪近くのアガン・ナンソの例をあげると、彼がこの叛亂に先立ち、ロブサン・ダンジンから受け取った命令書は次のようである。

親王(「ロブサン・ダンジン」の書、アガン・ナンソに送った。汝は汝の番の兵を訓練せよ。漢人たちをおそれるな。

親王(「である」)我れはまもなく兵を率いて来る。我れら

(「一緒に」)漢人たちを殺そう。甚だ緊要、甚だ緊要……。

この命令書についてはまだ考察の餘地があるが、ロブサンはこの莊浪のナンソにまで叛亂を呼びかけていたのである

(註(57)雍正二年一月一九日付奏摺参照)。

THE REBELLION OF LOBJANG DANJİN AND THE QING DYNASTY: from the perspective of the course of the rebellion

KATO Naoto

The rebellion of Lobjang danjın that arose in the first year of Yongzheng 雍正 (1723) was carried out by the chiefs (tayiji) of the Qoşuγud tribe of Kōke-naγur and by the Tibetans and Muslims who were attached to them. Among them were also included many lamas (blama). The rebellion was quite carefully planned; nevertheless, it proved to be no match for the Qing army, and in less than one month it was thoroughly repulsed. Moreover, because there was dissension within the Qoşuγud tribe, in a little over four short months they were completely subjugated.

One reason that can be offered for the defeat of the rebellion is that Lobjang danjın was too optimistic in his estimate of the tribe of Ĵegün-γar. The rebellion took place at a time when the chief of the Ĵegün-γar, Cevang rabtan, was trying to improve his relations with the Qing and was trying to establish his influence in the areas of Kazâkh and Kirgiz. And at this time, he still harbored a serious grudge against the Qoşuγud because previously, the chiefs (tayiji) of the Qoşuγud tribe had united with the Qing and had wiped out the army of Ĵegün-γar which had entered Tibet. It was impossible from the beginning for the Qoşuγud to request reinforcements from this Ĵegün-γar.

A second reason that can be offered for the defeat is that on the Qing side, the preparation against the rebellion, especially of commander Nian Gengyao 年羹堯, was meticulous, and the response was swift. Nian personally made his way to Xining 西寧, the main target of the Qoşuγud attack, and there he recruited troops and prepared for the assault. And the Qing side was able to rally the tayiji of the pro-Qing faction who had fled and other defectors, while the leaders of the rebellion were left in isolation.

The Qing took this opportunity after the suppression of the rebellion to introduce the Banner system (niru-jaşaγ) into Kōke-naγur, and thereby to establish direct control over the area.